

古今伝授の間

この古い建物は、日本文学や皇室の伝統と絡み合った複雑で豊かな歴史を持っています。古今伝授とは、醍醐天皇（897-930）の命により編纂された「古今集」に収められている詩の難解な解釈を口頭で伝える伝統です。

後に 21 もの和歌集が編纂されますが、そのうち最古の古今集には 1111 首が収録されており、うち 450 首以上が匿名で書かれたもので、それ以外は 120 人以上の実名の歌人が詠んだものです。細川家初代の熊本藩主の祖父である細川藤孝（1534-1610）は、後陽成天皇（1571-1617）の弟である八条宮智仁親王（1579-1629）に古今集の奥義を教えることになりました。これは伝統的に廷臣の職であったため、武士である藤孝がこの役割に選ばれたことは大変名誉なことでした。藤孝は、元々は京都の御所の敷地内にあったこの建物で、八条宮智仁親王に教えていました。

入母屋造の建物は 400 年以上の歴史があります。1877 年の西南戦争で焼失した茶室の代替として、1912 年に水前寺成趣園に移築されました。1955 年に一般公開され、直近では 2010 年に復元されています。内部には興味深いディテールがたくさんあります。例えば、前室の奥にある襖に描かれた青い花の絵は「五七の桐」です。五七の桐はかつて皇室の紋章だったもので、左右の茎が 5 本、中央の茎が 7 本の花を咲かせることが「五七」の由来になっています。

眺望の良い部屋

左側にある 2 枚の屋久杉の襖は、迫力のある木目模様の上に、わずかに黒の顔料が塗られているのが最大の特徴です。徳川幕府（1603-1867）の支援を受けた日本画の有力な流派である狩野派の狩野永徳（1543-1590）が遺した唯一の水墨画です。5 本の柱と天井は建築当時のもので、裂け目のあるざらざらとした表面が古さを物語っています。左側には尖ったアーチ型の優雅な火灯窓があり、池の向こうの景色が、山の景色の縮図のように切り取られています。手前の右隅には、「古今伝授の松」として知られる切り株があります。これは、後陽成天皇の弟である細川藤孝にゆかりのあるものです。

詩的正義

1600 年、藤孝は京都に近い丹後の田辺城で城攻めにより包囲された者の一人でした。藤孝は生きて帰れるかどうかわからなかったため、古今集の伝承を守る者として、城内の庭の松を「古今伝授の松」と名付けました。後陽成天皇は、藤孝の死で口伝が断絶することを心配して、包囲側に藤孝を逃がすように命じました。不安の渦中にあった藤孝が心を交わした松は、後に枯れてしまい、切り株と根だけが残りましたが、人生の苦難を偲ぶため、「古今伝授の間」にひっそりと納められました。

奥の部屋の襖に描かれている絵は、海北友松（1533-1613）の襖絵で有名な「竹林七賢図」を再現したものです。